

ユーザ・オリエンティドなOPAC実現のために

2003年11月20日

平成15年度第2回総合目録データベース実務研修

神戸大学 鳥谷 和世
成蹊大学 園部 裕元
文教大学 鈴木 正紀

1. 問題の所在

- ・利用者にとって分かりやすい目録とは？

この問いは目録作成者にとって永遠の命題である。日頃、目録作成者は資料を手に取り目録を作成するわけだが、その資料が最終的に利用者の手元まで届いているのかという不安を抱えている。この不安はいったいどこから来るのだろうか？

日常業務の中に埋没し、とかく忘れがちなことだが、資料は利用者に利用されるためにある。利用者にとって有益な目録とは、OPAC というフィルターを通して利用者が内在している要求から、一次情報を的確に導き出すことの出来るものである。

だが、現実はずしもそうではない。目録規則に則って作成された一次情報が、利用者の要求と必ずしも一致しないということが多々ある。

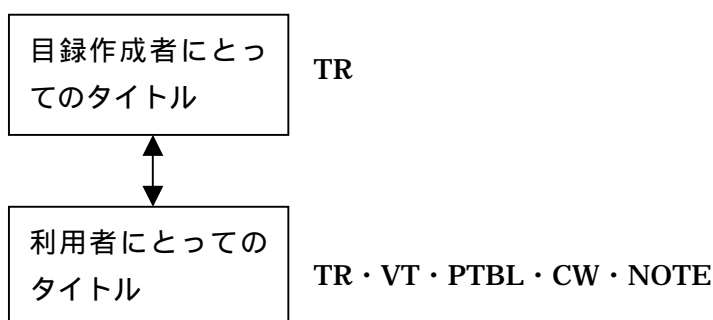
利用者のニーズが多様化し、単に所蔵情報を検索する以上の役割がこれからの OPAC に求められている。対象が明らかである場合(その資料を欲している)と曖昧である場合(そのような資料を欲している)があるが、両者に対して的確な情報を提供しなければならない。

利用者のさまざまな要求に対して的確に導くことの出来るユーザ・オリエンティドな OPAC を実現することがわれわれの課題である。では、規則を逸脱することができないわれわれ目録作成者はどうすればよいのか？

- ・利用者にとっての『タイトル』とは？

ここで利用者にとってのタイトルとは何であるのか？

という点を考えてみたい。目録作成者にとってのタイトルは原則 TR である。だが利用者にとってのタイトルは必ずしもそうではない。



利用者にとってのタイトルとは時に TR・VT・PTBL・CW・NOTE まで含まれると考える。こうした目録作成者と利用者との概念の相違も考慮に入れることが必要だ。

・ OPAC の役割

そもそも OPAC とは利用者のデマンド(要求)に対して的確な一次情報を提供するものである。その上でデータをどのように作成するのか、検索にどのように反映させるのかという2つのアプローチがあると考ええる。

1.1. アプローチ

ユーザ・オリエンティドな OPAC の構築のために以下の2つのアプローチを掲げる。

データの作り方

データの中に十分な情報があること
量的観点

検索システム

検索における機能
表示における機能
質的観点

2. データの作り方

ユーザ・オリエンティドな OPAC を実現するための2つのアプローチが明確になったところで、まずデータの作成というフェーズについて考察したいと思う。資料は刊行形式からいわゆる図書と雑誌に大別できるが、今回設定したテーマにおいてはいわゆる図書、雑誌を別の観点から考えていく必要があると思う。雑誌については収録された論文を検索するため各種検索 DB が提供されていることが多く、それと各図書館の所蔵検索 (OPAC) とのリンケージが大きなテーマになると考えられるが、今回は双方を対象にする余裕はないため、対象を図書に絞りたいと思う。

いわゆる図書の書誌データ作成にあたっては、- 利用者の内在的なものを含め - ニーズに対応するという視点にたつと、目録担当者としては例えば、以下のような点について不安を抱かざるをえない。

1. 利用者が必要とする“著作”が書誌データ作成の単位と同一ではない

例 複数の著作から構成される論文集、著作集などの資料

個別に書誌を作成するのが適当であるが、著作としては同一である資料

2. NII の目録作成の基準に従うと書誌階層の捉え方が一般利用者の常識とずれるおそれがある

例 利用者にとって巻次レベルの情報だろうと推測されるものが、固有のタイトルととらざるをえないため、個別に書誌が作成されることになり、かつ利用者にとってタイトルと思えるものが親書誌のタイトル、あるいは中位の書誌単位のタイトルとして記述される

ここで目録作成の原点に立ちかえると、全国的な総合目録に参加して目録業務を運営している現状を考えれば、一定のルールに従い、書誌データを作成していかなくてはならないのは当然である。また書誌データ上にない情報を検索することは勿論できない。さらには検索された書誌データが利用者による資料の選択の判断根拠になることも忘れてはなるまい。それらを踏まえ、先にあげた点について書誌データ作成側での、可能な範囲での対応を考えると以下になるのではないだろうか。

1. CW（内容注記）の充実

少なくとも、論文集、著作集などの資料については、CW（内容注記）は必須入力項目と考えるべきである。

2. これについて、個々の書誌データ作成において有効な対応は事実上無理だろうと思われる。ルールに従った書誌を作成し、書誌データはそうあるものとして、検索機能、表示機能において改善をはかるべきであると考え。

目録作成側での対応は上記のようなものになると思われるが、そこにはおのずから限界があり、検索システム全体でユーザを支援していくことが必要になると思われる。これについては次節で述べるが、データの作成という観点を大きくとると、各種典拠ファイル、参照ファイルを提供することで、検索の精度をあげるという解決策も考えられる。CWについても内容細目ファイルのような参照ファイルが整備されれば目録作成側での入力は不要となる。ほかにも著者名典拠、件名典拠（もしくは統制語ファイル）等を整備することが可能になれば、検索システムで参照するデータのいわば“量”を確保することができ、結果、利用者の多彩な検索ニーズに応え、かつ検索システムの機能改善とあわせて確実に利

ユーザーを一次情報に導くユーザ・オリエンティドな OPAC の実現に近づくことができるのではないだろうか。

3. 検索システム

この節では、前節で提唱された基準によって作成されたデータを、いかに探すかという点と、利用者に対していかに見せるかという側面について提案をしてみたい。

テーマから探す情報探索においては、(1)適切な検索の実施、(2)その結果がどのように利用者 (= 検索者) に伝わるかということが重要である。

(1)については、適切な検索語の選択ということが重要となる。また(2)については検索結果が何十、何百とあるときに、それが利用者のニーズに合うように表示されることが望ましい。この点、サーチエンジンにおいては、当該ページへのリンク数で適合度を算出して提示する Google のようなサイトも存在する。われわれが対象としている図書館資料の検索ツールたる OPAC について、これらのサーチエンジンから学べることは少なくない。OPAC においても、そのような環境ができないだろうか、という問題意識から、以下のような点について考察してみたい。

(1) 適切な検索語設定のための機能

獨協大学（埼玉県草加市）の図書館は、図書館システムに伊藤忠テクノサイエンス社の neoCILIUS を導入している。この図書館の OPAC は、NDC9 版の相関索引を用いて、階層的に自分にとってふさわしい言葉 (= 概念) にたどり着けるような工夫がされている。これは、思いついた語から検索をかけて一気に結果を返す、というものとは異なり、インタラクティブなやりとりによって適切な語へナビゲートする機能と捉えることができる。

http://www.lib.dokkyo.ac.jp/servlet/opac.OpacFormServlet?lang=JPN&tab_index=1&src_id=1

(2) 検索結果の表示機能

検索結果表示機能として、「フィルタリング機能」「適合率順の表示」について述べる。

フィルタリングとは「人間の情報収集行動から興味、関心、意図といった問題意識および獲得された情報を収集し、類似の問題意識を持ったものに提供することで情報収集活動を支援するための情報収集の手法」と定義される。これを具体化するためには、情報探索者があらかじめ、自分にとって有用な情報であることを示すキーワードをプロファイルに登録し、検索結果との照合により、結果に対する重み付けを行うものである（フィルタリング自体には、有用なものを抽出するのとは逆に、不要なものを排除するという方向もある）。

検索条件に対する適合率を算出して表示する機能について、この場合の「適合率」とは、検索条件と検索結果との間に算出された「合致の度合い」である。この度合いの順に表示する。

4. まとめ

利用者の視点にたつと現行の OPAC にはまだまだ改善の余地が多いと思われる。そのためには少なくとも2つのアプローチが必要だと思われる。即ち目録作成者それぞれが利用者の便宜を意識しデータの作成にあたり同時に、検索システムの機能改善を図ること、これによりトータルとしてユーザ・オリエンティドな OPAC の実現が可能になるのではないだろうか。